

日本企業の技術で 安全な水を供給

「一歩、街中に足を踏み入れると、その力強い熱気に誰もが圧倒される。「これからみんなで成長していこう」という、独特のエネルギーを感じます。そう話すのは、「なんとかしなきやープロジェクト」※1著名人メンバーの伊藤聡子さん。2012年10月中旬、アジアの最貧国の一つと言われるバングラデシュを訪れた。

「地方から日本を元気にしたい」と、フリーキャスターの傍ら、起業家の育成を目指す新潟県の大学機関で客員教授を務める伊藤さん。全国各地を飛び

回り、ソーシャルビジネスなどをテーマに講演も行っている。「現地の人たちと日本企業が『Win-Win』となるビジネスモデルのヒントを持ち帰りたい」と意気込みを見せていた。

日本企業の海外進出、特に、インフラ整備が整っていない開発途上国での事業展開にはリスクが伴う。そんな企業を後押しするのもJICAの役割の一つだ。伊藤さんが訪れたのは、南部のバゲルハット県の村。株式会社天水研究所がJICAのBOP支援事業※2を通じて、貧困層の飲料水確保、健康改善に取り組んでいる地域だ。

バングラデシュの沿岸部では、湖や池の水が十分でない上、地下水にはヒ



アジア砒素ネットワークが支援する地域の井戸を視察。「水は命の要。安全な水の確保が大事ですね」と伊藤さん

素や塩水が混ざってしまう。このままでは飲料水として利用できない。そこで天水研究所が考案したのが、自然の恵みである雨水をためて飲料水として活用する。雨水タンク。6カ月の乾期もしのげる雨水を確保できるほどの大きさで、水への混入物も防ぐことができる。「シンプルなのにいろいろな工夫がされている。このビジネスが広がることで、多くの人を救えるといいですね」と伊藤さんも期待を寄せた。

オールジャパンで 交通渋滞の緩和を目指す

首都ダッカに戻ると、市内の道路を埋め尽くしていたのは、車、車、車……。アジアの都市の中でも、ダッカの交通渋滞のひどさは有名。渋滞緩和のためには、バスのような公共交通機関の利用を促進する必要があるが、料金の徴収に時間と手間がかかることが大きな課題となっていた。

そこで立ち上がったのが、日本のIT企業、株式会社エヌ・ウェーブとJICA。すでに日本で定着しているS



バングラデシュ版Suica「SPASS」を使ってバスに乗り。「ダッカの人たちも便利になり、交通渋滞の解消にもつながって一石二鳥ですね」

uicaを参考にプリペイドカードの導入に乗り出した。2012年4月から「SPASS」と名付けて導入を開始し、路線によっては半年の間に乗客の6割以上が利用。カードに内蔵されているICチップには、ソニー株式会社の製品が使われているという、まさにオールジャパンの取り組みだ。

伊藤さんもバス停の窓口でチャージしたカードでバスに乗車。「このカードを使えば、バスも気軽に利用できますね。大気汚染の軽減、物流の促進も期待できるはず」と話していた。

特別レポート

文=三田村麻季子(JICA広報室)
写真=小野寺美穂(株式会社三桂)



天水研究所が普及を進めている雨水タンク。「まさに、現地の生活に密着して生み出されたビジネスで素晴らしいと思います」

伊藤聡子さん 日本の技術と 思いやりに触れる

inバングラデシュ

アジアの最貧国の一つ、バングラデシュでは、世界各国の企業がビジネスを通じて国際協力を展開している。「日本企業にも、開発途上国進出の活路を見いだしてほしい」。フリーキャスターの伊藤聡子さんはそんな思いを胸に、2012年10月にこの国を訪れた。

日本のNGOの 息の長い草の根レベルの支援

さらに伊藤さんは、「なんとかしなきやープロジェクト」のメンバー団体である2つのNGOの活動を視察した。その一つがNPO法人アジア砒素ネットワーク。1950年代から地下水を飲料水として使い始めたバングラデシュでは、やはり、内陸部でもヒ素の被害が深刻。そこで日本の公害対策の経験を生かし、ヒ素濃度が高い村では地下水ではなく湖の水をろ過し、飲料水を供給するプロジェクトを展開中だ。「村の人たちの心からの笑顔が、安全な水の大切さを物語っていますね」と伊藤さんは感動していた。

また70年代から、この国で息の長い支援を続けるのが、認定NPO法人シヤプラニール市民による海外協力の会。その活動拠点の一つ、ダッカ市内のスラム、ボナニ地区のコライルセンターへ。10〜15歳の女の子たちを対象にしたこの教育施設で、現地のNGOと連携し、国語や英語、算数などの基礎教育に加え、図工、裁縫、保健衛生といったさまざまな教育を実施している。

バングラデシュでは女性の地位が低く、女の子は学校にも行けず、家政婦などとして働きに出ているケースが多い。センターでは生き生きと将来の夢を語っている。実際の生活のことを聞かれると、その表情が一気に曇ってしまう。「彼



シヤプラニール=市民による海外協力の会が支援するセンターで楽しく学ぶ子どもたち。将来の夢は先生やお医者さんと話してくれた

わたちの笑顔が大人になっても消えないように、自立のための教育は大切なこと。がんばってほしいですね」と伊藤さんはエールを送った。

日本の企業による新たな挑戦とNGOによる長年の支援。どちらも、複雑な課題を抱えるバングラデシュの発展に、地道に、そして着実に寄与している。「日本の経験や技術が役立っているのは、日本人としてとてもうれしい。国際協力を持続可能なものにするためにも、バングラデシュでのさまざまな取り組みが成功するよう期待しています」と伊藤さん。帰国後、そのメッセージを日本各地で発信している。

※1 途上国の現状について知り、一人人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、JICA、国連開発計画(UNDP)。
※2 開発課題(所得教育水準の向上、安全な水の普及などの解決を目指すBOPビジネス(年間3000ドル以下で暮らす貧困層を対象にしたビジネス)の実施を検討している企業など)に対して、JICAは市場調査、ビジネスの形成、事業実施計画の策定までの調査を支援している。